覇王と風の王

シゲミン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
覇王と風の王

【Ｎコード】
Ｎ６７２０Ｐ

【作者名】
シゲミン

【あらすじ】
覇王と風の王。２人の王の会合。

trick1（前書き）

初投稿です。エア・トレックとローラーブーツってなんか似てるような気がするよね、という発想から生まれた妄想です。
詳しい設定などは決めていませんが、評判があまりに悪くなければ続きを書くかもしれません。
感想お待ちしてまーす。

trick1

深夜、クラナガン市街。

アインハルト・ストラトスは1人でジョギングをしていた。

—今夜はなんだか調子がおかしい。

荒い息を吐きながら彼女はそう心の中でつぶやく。いつもならこれぐらいで息が苦しくなったりしない。覇王イングヴァルトの血と記憶を受け継ぐ者として、そうでなくても武人として、スタミナが低いというのは許されないことだ。実際、彼女は休憩などとらないで長時間戦い続けることができる身体を作ってきた。

そう。この息切れの原因は、スタミナ不足なんかじゃない。

胸に刺さるような動悸のためだ。今朝、起きた時からずっと続いている言いようのない不安と緊張は、魔法学院に行っている間も途切れることはなかった。クラスメイト達も気づいたようで、気を遣わせてしまっていた。

そこまで考えたところで、見覚えのある景色に足を止める。思い出されるノーヴェとの戦い。そこは、かつて彼女が夜な夜な戦いを繰り返していた場所だった。

あの頃は、ただがむしゃらに戦っていた。戦い続ければ、戦って勝ち続ければ、いつか"最強"を証明できると信じて。

そう、あの電柱の上に立って—

—かつての自分が

「え？」

いた場所に、誰かが立っていた。

身長は彼女よりも若干高い。スラリと伸びた手足は、かなりの細身であることを伺わせるが、顔は夜の闇にまぎれてよく見ることができなかった。何かに惹きつけられるように、その顔をもっとよく見ようと身を乗り出したその時。

「覇王・アインハルトちゃん？」

唐突に問いかけられた。声からすると、男だ。
「確かに私はアインハルト・ストラトスですが。初対面の得体の知れない人に”ちゃん”付けされる筋合いはありません」
ピシャリと返すと男は肩をすくめた。
「おう、怖い怖い。それで、ちょいとお願いがあんねんけど―「お断りしま」―ワイと、戦ってくれへんか？」
「・・・当てつけですか。ご丁寧に、同じ場所で、同じ電柱の上に立ってまで」
自分でも声がさらに剣呑になっていくのがわかる。間違いなく確信犯だ。
対して男は口元だけでニヤッと笑う。しかし、出てきた言葉は彼女の想像とはかけ離れていた。
「勘違いしてへん？ワイ、電柱の上になんか立ってへんで？」
「え？」
今夜2度目の驚愕。慌てて男の足元を見る。あれは、ローラーブーツ、だろうか。一見普通の靴に、大き目のホイールが左右2個ずつ付いている。さらにその下は―何も、ない。男は、確かに電柱の上ではなく、空中に、立っていた（ういていた）。しかし、それだけなら驚くに値しない。彼女が驚愕したのは、男が”魔法を使っている気配が一切しない”ためだ。
呆然としたまま問いかける。
「貴方は、何者、ですか」
男がまたニヤッと笑う。その瞬間、月明かりが彼の顔を照らし出した。真っ黒な髪に、狼のような印象を与える鋭い細目。
「風の王（ウルヴス・ガーレ）・竹内空」
疾風の狼が、獰猛に嗤った。

trick1（後書き）

いかかでしたでしょうか？
もし続きが書ければ次は戦闘シーンです。
感想がユーザーしか受け付けないないないようになっていました。今は改善しています。

trick2（前書き）

奇特にもポイント評価をつけてくれた人がいましたので、戦闘シーンに入ります。

trick2

「タケウチ・ソラ」
聞かない名前だ。音感からすると、ミッドの名ではない。
「まあ、こっち風にすると空・武内なんやが」
そう言って空は喉の奥だけでクッと嗤う。
「ワイって奴はなんちゅー親切なんや。誰かさんとちごて名乗った上に説明までするやなんて」
明らかに彼女のことを揶揄しながら一人でウンウン言っている空の様子をみて、彼女のこめかみに青筋が走る。
「・・・いいでしょう」
「ん？なんて？」
「そんなに戦いたいなら、いくらでも相手をしてあげますっ！！」
一息で戦闘準備をする。感覚は鋭敏に、意識はクリアに。感情の昂ぶりそのままに、一気に電柱を伝って大空へと駆け上がる。
―どこまでも高く。空よりも高い場所へ。
月を背に見下ろした空は、やはり獰猛に嗤っていた。
頭上から右拳を打ち下ろす。空はそれを左腕で受け止めるも、さすがに衝撃はどうすることもできなかったようで、そのまま下方へと吹き飛ばされていく。
―いける。
どういう仕組みで浮いているのか知らないが、少なくとも攻撃が通じないわけではない。飛行魔法を使っている相手と戦っているのとそう変わらないのだ。ならば。
「たたみかけるっ！」
電柱を蹴って加速、追撃する。息つく暇もない拳と蹴りの連激。手加減など一切しない。自分が持てる限りの力で攻撃していく。
一方、空はその１つ１つを的確に捌いていく。次々に打ち込まれていく攻撃を受け、弾き、ときには流しながら、衝撃に逆らわず少

しずつ吹き飛ばされていく。
「なんや。急にやるきマンマ「うるさいですっ！」ってちょ！」
空の言葉を遮って打ち込まれる頭を狙った容赦のない一撃を、空は相変わらずニヤニヤ笑いながら身体を折るようにして回避する。
「そんなつれのうせんといてや！ワイっ！大好きやねんて！アインハルトちゃんのことっ！」
そんなことは微塵も思っていない顔のまま、次々と攻撃を捌いていく空。気がつけば、舞台は遠くはなれた別の２本の電柱の上へと移っていた。
「ちゃん付けされる筋合いはないと言ったはずですが」
「ほんま愛想ないなー自分。そんなんやと、彼氏とかできひんで？」
余計なお世話だ。ただでさえピクピク震えているこめかみがさらに引きつる。
「もういいです。—これで、終わりにしましょう」
腰を落とし、左拳に渾身の魔力を篭める。空もそれを察したようで、わずかに顔色が変わり警戒する。
互いに息も吐くこともできないほどの緊張。わずかに生まれた静寂を破ったのは、やはり彼女のほうだった。
「—シッ！」
一瞬で距離をつめる。空は慌てることもなく、左拳が打ち出されるタイミングを計っている。しかし、彼女はそのまま右手で空の肩をつかんだ。
「っ！」
さすがにそれは予想外だったのか、戦いが始まって以来初めて空の顔に焦りが見える。その一瞬の隙を逃さず打ち込まれる渾身の左。空もすかさず右腕を身体と拳の間に滑り込ませようとするが、このタイミングではまに合わない—！

衝撃、そして轟音。

これ以上ないほどの一撃は、空の身体に、突き刺さって—いなかった。

３度目の驚愕。ガードが間に合うはずはない。一体どういうことなのかと拳の先をみて唖然とした。拳と身体の間に滑り込ませ損ねた空の右腕の横、身体へあと数ｃｍという所で、彼女の拳は止まっていた。力を入れ続けている今も。ギリギリと音を立て、まるで見えない壁がそこにあるかのように。

「惜しかったな」

その言葉に顔をあげると、氷のような冷たい目をした空がいた。

「せやけど―ここまでや」

そう言って、空は上へと飛び上がる。彼女は呆然としたまま空を目で追いかけた。

そこで、ふと、風を感じた。

吹き上がるように。どこかに。まるで、空へと集まるように。

ああ、そういえば。

彼は、自分のことを、風の王と言っていたっけ。

そこまで考えたところで、彼女は圧倒的な風によって地面へと吹き飛ばされた。

trick2（後書き）

いかがだったでしょうか？
今回は予告どおり覇王対風の王の戦闘シーンです。ちなみにこの戦闘はエア・ギアのガゼル対武内兄弟の戦闘シーンをイメージして書きました。初めての戦闘描写。どうでしたかね。
感想をお待ちしていまーす。

ｔｒｉｃｋ３（前書き）

なんとお気に入り登録してくれた方がいらっしゃいます。
作者としては気に入っていただいて感激です。
というわけで続きを投稿させていただきます。

ｔｒｉｃｋ３

「うぅ・・・」
「弱き者よ、汝の名は女なり《Ｆｒａｉｌｔｙ，ｔｈｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ　ｗｏｍａｎ》。っちゅーわけやな」
ポケットに両手を入れたまま、空はひとりごちた。
小規模の竜巻をかるく凌駕するほどの豪風によって地に墜とされたアインハルトは、ボロボロになって倒れ付している。意識も朦朧としていて、定かではないようだった。一方の空にはかすり傷１つない。文句のつけようのない完璧な勝利だった。だというのに、空は顔をしかめている。気に入らない、納得がいかないというよりは、どこか訝しげといった様子だ。
「しっかし、えらい簡単やったな。聖王さんとつながっとる”覇王”が出たっちゅーから新しいフラグかと思ったんやが・・・。意外にヴィヴィオとは関係あらへんのか？」
器用に頭だけを９０度横に傾ける。まるでフクロウのようだった。しばらく、んー、と唸り、これまたフクロウのようにピョコっと頭を戻してそのまま空を見上げる。そして、暗闇に向かって声を掛けた。
「どない思う？キリク」
問いかけ。本来なら答えが返ってくるはずもない。しかし。
「その台詞は、母が、夫の死後間もなく夫の弟と結婚してしまったことを嘆いてハムレットが言った言葉だ。用法としては見当違いもいい所だな。間違いなく０点だ」
響き渡る声。その声質は静かで、どこか知性的なものを感じさせた。その声の主は、先ほどまで空がいた電柱の上立っていた。聖職者は着るローブのような１枚布の衣装。前面には大きく十字架が見える。そして何よりも特徴的なのは。暗闇の中でもはっきりとわかる、両の瞳に輝く十字架だった。

「うっさいわ。ワイかてそんくらい知っとるわい。そっちやのうて――」

「キーパーソンなのは間違いないだろう。だが、君にあっさり倒されたこと、戦闘中に手を抜いていた様子が見られなかったことを考えると、敵ｓｉｄｅというわけではなさそうだ。・・・あるいは主人公なのかもな」

キリクと呼ばれたその男は、そう言って口元だけでフッっと笑った。空とは違って女性なら思わず見惚れてしまうような涼しげな笑みだった。・・・少しばかり気障ったらしい所もあるので、相手をむかつかせるという意味では空のニヤリ笑いと似たようなものだったが。

「ああ、そっちっちゅうわけか。ほんなら、手だすのはちっと早かったんと違う？」

空はそれを気にした様子もなく右手でガシガシと頭を掻く。

「まあ、力を把握できたと考えればいいだろう。少なくとも獅子身中の虫ではないことははっきりした。後は巻上女史に頼むことにしよう。治安部隊が到着する前に帰還するぞ」

「リョーカイ。ほな帰ろか」

通りがかった不届き者が手を出せないように、念のため彼女の周囲に簡易的な結界を張っておく。万が一結界を破ろうとしても、その間に治安部隊が到着するだろう。

結界を張り終えた後、彼女を見つめたまま空はキリクに再び問いかける。

「なあ、キリク」

「なんだ？」

「お前やったら、どないなタイトル付けんねや？ｓｔｒｉｋｅｒｓ？とかはなしやで？」

「そうだな・・・」

キリクはしばらく考えた後、

「今回のストーリーは、高町ヴィヴィオを中心にして動いている。

それは間違いない。ならば―最後にＶｉＶｉｏ、とでもつけようか」
「魔法少女リリカルなのはＶｉＶｉｏ？ありきたりやな、また」
「それなら綴りでも変えてみるか？」
「それやとヴィヴィオとちごうてしまうやないか」
「それもそうだな」
最後に顔を見合わせて笑いあって、２人はその場を後にした。

ｔｒｉｃｋ３（後書き）

はい。爆弾発言連発のｔｒｉｃｋ３でした。
空の口調がなんだかおかしいのはそこらへんが関係しています。決して作者のせいではありません。ええほんとに。
この設定は色々と好みがわかれると思いますが、感想をお待ちしていまーす。

ｔｒｉｃｋ４（前書き）

いつの間にかユニークアクセスが５００を超えていました。こんな駄文を読んでくれている人がたくさんいることに感謝感激雨霰です。

というわけで、再びの投稿です。

trick4

「空の玉璽（レガリア）とは」

　BAR独特の、薄暗い照明に溶け込むかのように黒塗りの椅子に深く腰掛けている男―キリクが言葉を発する。誰かに語っているようでもあり、自分に言い聞かせているようでもある声色だった。

「すべてのA・T（エア・トレック）に搭載されているネットワークをつないだ電脳世界―skylinkのことを指す。それを利用すれば、すべてのA・T、そしてその技術を利用したもののすべてを掌握することができる。そのことがもたらす力は、世界をたやすく支配できるほどのものだ」

　その目は、虚空をじっと見つめているようで、その実何も写していない。

「だからこそ、我々は真っ先にA・Tの存在の有無を調べた。いくら知識では存在しなかったはずでも、実際に自分が履いているものは確かに実在していたからだ。まだ、なんの繋がりも持たなかった我々は、各々が独自に調べた結果―この世界には、A・Tが存在しないことを確信した。もちろん、自分が所有するものを除いて、だが」

　そこで彼は自分の足元に視線を移す。そこには、シンプルな靴に左右2個ずつの大きめのホイール、そいて足の甲にあたる部分には、どこか石を思わせる拳大のパーツが付いていた。

「しかし、そこである1つの仮説に気づく。この世界には当たり前のように存在する機器、魔導師の必需品、デバイス。もしA・Tがデバイスに分類されるならば―それによってskylinkがデバイスを支配できるならば―それは、世界を滅ぼしかねないことだと」

　そこで初めて、カウンターの端に頬杖を突いて座る男―空が口を挟む。

「ミッドだけやない。端から端まで全部の次元世界にあるデバイスぜーんぶが思いのままになるっちゅーことやさかいな。ごっつぶっ

そーな話やで」
「ああ、だからこそ我々は夜を駆け、同士を探した。自分と同じ境遇の者を、自分の考えを理解し、共に危険に立ち向かう者を見つけるために。ある者はカリスマ美容師になり、ある者は医者になり、またある者はライブハウスで観客（オーディエンス）にビッグウェーブを起こした。皆がそれぞれのやり方で皆にメッセージを発し、ここに７人の王が集った。そう、７人、だ」
「残っとったんは、荊の玉璽だけやった・・・」
　キリクの語りに合いの手を挟み、空はカウンターの真ん中に置かれている物体―ひび割れた、１足のＡ・Ｔの方を見やる。
「そう。この荊の玉璽と、このメッセージのみだ」
　キリクはおもむろに立ち上がり、そのＡ・Ｔに近づいて、ある音声記録を再生する。
「っくそ！ここまでかよ・・・。―おい。よく聞いとけ。ｓｔｒｉｋｅｒｓで終わりじゃねえ。まだ続きがある。ヴィヴィオが、高町ヴィヴィ―」
　音声は、そこでノイズと共に途切れた。
　空とキリク。２人の王の間に沈黙が落ちる。
「・・・まだ、続きがある、か」
　そう呟いたのは、どちらの方だったのか。
　持ち主たる”王”がいない玉璽は、何も語ることはなかった。

trick4（後書き）

いかがでしたでしょうか？
今回はどことなくシリアスな雰囲気を狙ってみました。感のいい人はもう空達がどういう人なのかわかりますでしょうかね。
感想をお待ちしてまーす。

ｔｒｉｃｋ5（前書き）

めりーくりすます、なのですよ。わふー。
一日遅れですけど。
実は昨日のうちに上げるつもりだったんですが、徹夜で友人と飲んでたもので・・・。ええ、男のみですがなにか？
そういうわけでｔｒｉｃｋ5です。

「背中を中心に、約１４箇所の打撲、ってとこ。地面に叩き付けられた時に、とっさに受身をとったのはさすがだけど・・・それを差し引いても上から加えられた力がすごかったのね。本人は風だって言ってたけど。まるで、小型の竜巻１つ分の風が、まとめて彼女にぶつかったみたい、って言えばわかりやすいかしら？」
「そんなに・・・アインハルトさんは大丈夫なんですか？」
女医から告げられた診断結果に、心配に顔を歪めながら、高町ヴィヴィオは友人の様子を尋ねる。
「まあ、特に問題はないわね。打撲はひどいけど、逆に言えばそれだけだもの。他に目立った外傷はなし。今日１日安静にしてれば、明日には退院できる。今は眠ってるけど、面会してく？」
「いえ。起こしてしまったら悪いので・・・やめておきます」
返ってきた言葉にほっと息を吐く。命にかかわったり、障害が残ったりするような怪我ではないので、とりあえずは安心だった。それでも、友人が何者かに突然襲われ怪我をしたという事実は、彼女の心に重くのしかかる。
「アインハルトさん・・・」
未だ病院のベッド眠り続けている彼女のことを思って名を呟くと、目の前の女医に、手の甲で額をペシッとたたかれてしまった。
「そんな顔しないのっ」
「あうっ」
「憂鬱な顔してたって、友達は喜ばないわよ？貴女の気分と周りの空気が悪化するだけ。今のうちに、目が覚めた時にいつも通りの顔ができるようにしておきなさい？そのほうが彼女のためよ」
そう言ってにっこりと微笑む。彼女の知るどんな女性とも違う、大人の色気を感じさせる艶のある笑顔を真正面から見て、同性なのに思わず顔が赤くなってしまった。羨ましい、とも思う。なんとい

うか、ボン、キュッ、ボンを体言したかのような身体だし、それなのに肉付きは良くてむちむちしてるし、髪も上でクルクル巻けるくらい長くて艶やかだし。
（でもでもっ！私だって大人になったら、素でこれくらい・・・）
などと益体もないことを考えていると、不思議そうにどうしたの？と聞かれたので、なんでもないです、あいまいに笑ってごまかした。
「ありがとうございました。あの、えと・・・」
そこまで言いかけて、女医の名前を知らないことに気づいた。女医もそれを察したようで。
「イネよ。イネ・巻上」
「ありがとうございます、マキガミ先生」
「どういたしまして」
再びにっこり微笑む巻上女医。やっぱり綺麗だなぁ、とぼんやりその笑顔を見つめていると。
「──イネ」
巻上女医の後ろから男が近づいてきて、声を掛けた。名前で呼んだということは、親しい仲なのだろうか。ひょっとすると恋人なのかもしれない。かなりの美形だった。鮮やかな金髪は、まるで炎が燃えているかのような髪形によくあっている。清潔さを感じさせる白の上下に、上から黒いジャケットを羽織っていた。
「空から連絡があったよ。今夜、天空の塔（トロパイオン）に集合だそうだ。君は来れるかい？」
「ええ、大丈夫よ。いつもの時間に終わるわ。迎えに来てくれるのかしら？」
「ああ。じゃあ、また夕方に」
それだけ言うと、最後にチラッと彼女の方を見やって、かるく笑う。またまた顔が赤くなってしまった。巻上女医は、しばらく彼女と一緒に遠ざかっていくいく彼の後姿を見送ってから、こちらに向き直る。

「じゃあ、私はこれで。お友達によろしくね？」
「あ、はい。さようなら」
颯爽と歩み去る。
「いつも通りの顔で会えるように、か」
確かに、心優しい彼女の友人は、悲痛な顔をしていると、そんな顔をさせてしまったと責任を感じてしまうかもしれない。そんな思いしてほしくない。
「──うん。学校が終わったら、皆でお見舞いにこよう。笑顔で、ね」
ようやく、彼女らしい笑顔が戻っていた。

ｔｒｉｃｋ５（後書き）

いかかでしたでしょうか？

今回はヴィヴィオｓｉｄｅ、もといリリカルｓｉｄｅです。

新たに２人の王が登場。最初にネタを思いついたときから、イネさん出すにはこれが一番自然かなーと思ってたんですよね。

はてさて、残りの王はどうやって登場させようか・・・。うーむ困った。

というわけで、次にどの人をだして欲しいか、よかったら感想に書き込んでみて下さい。作者の力の及ぶ限りに応えさせていただきます。

感想お待ちしてまーす。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6720p/

覇王と風の王

2010年12月26日07時55分発行